

# UrbanDesignLab.Magazine

What We Talk About When We Talk About Urbanism

都市について語るときに我々の語ること



Farewell Letters for Dear Lab. Members

研究室への置き手紙

---

vol. 277 Special Edition

2019/3/31

東京大学  
工学部都市工学科  
／工学系研究科都市工学専攻  
都市デザイン研究室

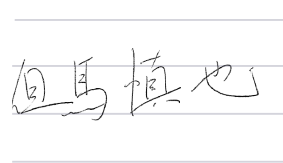
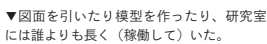
<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/>



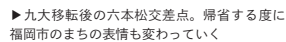
今回は『研究室に在籍した期間を振り返って思うこと、そして「都市」という曖昧でとらえ難いものを自分の中でどのように解釈したか』という、ちょっと難しいお題を投げかけてみました。都市について改めて振り返ったときにそれぞれが語ることは为什么呢？

text\_NAKADO/M2

清水浩晃



原田 理緒



この店の経験をどう語ろう、どう生かそう。ゴロツキどもと不良な大人たちの巣窟に、迷い込むほどの不運もなし、歓迎されざる客人なら特に。もう働かなくてもいいなんて、ほんと胸なでおろす自分がいる。大変興味深く、面白いことはそうだったが、ただとてもきつい体験だった。この世の歪みというのであろうか、絵の具をキャンパスにぐちゃぐちゃに塗りたくってそのまま放置したような、その上に寝転がれるというのであれば立派にこの世界の住民となれる。しかし、私にはそこまでの我慢がない。それでも疲れた頭で早起きカラスの声聞きながら思うのである、こんな場所が一所ぐらいあってもいいではないかと。多すぎても困る、でもなくても困るのだろう。あなたの人間性を試せるいい機会、そうではなくて？

松本春菜



▼高齢化社会の花と華







高下 貴裕

▶銀座通連会の事務所倉庫で眠っていた新聞記事スクラップブックと同年会報



都市デザイン研究室には博士課程に入学した 2015 年秋からお世話になり、この春、ようやく学位論文をまとめることができました。入学した当初、博士課程には社会人を経て大学院に復帰された先輩方が多く、修士からそのまま進学した経験の少ない自分はどのように独自の道を見出していくべきかを考えていました。そしてこれから長きに渡って関わっていけるようなフィールドを見つけ、そこで研究者としての足場を固めたいと思うようになりました。そんな中、ご縁あって銀座に通うようになり、そこに蓄積された豊富な時間に触れ、地元の方々と濃密な関係性を築くことができました。ライフワークとして研究に取り組みたいと思える街に出会えたことは、本当に幸運だったと思います。

先日マガジンをインタビューをしていただいたとき、都市という環境に関わりながら進めていく我々の研究には、自身の人生経験やこれまでに構築されてきた価値観が大きく反映されるものなのだと改めて気づか

されました。世界には無数の都市があり、そこから見出されるテーマも無数にあるという点において、可能性は無限大です。しかしその中の何かにたまたま目が留まり、好奇心を動かされるということには、必然性があるのではないのでしょうか。大きな書店に足を踏み入れたとき、我々には全ての本と出会う可能性が与えられています。しかしどの棚から巡り、その中からどの本を選び取るかは、それまでに蓄積された経験や感覚がものを言います。結果として全ての棚を見ることができなくても、そこで手に取ったものには特別な意味がある。私は研究室での日々を通して、そう思うようになりました。後輩の皆さんには、ぜひ自分の感性を大切に、出会った街やフィールドと真っすぐ向き合ってほしいと願っています。

最後になりましたが、慶應義塾大の学部 3 年生のころから 8 年間に渡ってご指導をいただいた中島先生、本当にありがとうございました！

矢吹 剣一



昨年に引き続き、2 年連続の寄稿となってしまいましたが、この度（2019 年 4 月より）神戸芸術工科大学環境デザイン学科の助教として赴任するため、研究室を離れることとなりました。（忘年会で言い忘れたので）この場を借りて皆さんにご報告致します。このポストドクターの 1 年は、UDC 等のおかげで博士課程以上に壮絶でしたが、特任研究員として受け入れて下さった中島直人先生をはじめ、研究室の皆さまに感謝申し上げます。あまり研究室にいませんでしたが（でも 10 階で清水くんの次くらいにはいたかも…）、初めて TA を担当した学年が修士論文を書いている様子は感慨深いものがありました。この 1 年の振り返りにはなりますが、やはり実際の都市に「住む」のも良いと思います。地域に腰を据えて、全人格をかけてまちづくりをやってみると自分に「入ってくる」ものが全く違うのでおすすめです（まずどこかのPJで試験的にやってみる？）。

さて、都市をどのように解釈したかというお題。月並みですが現場で感じたのはやはり「人」だなあ、ということです。地域住民の都市への関わり方やまちに対する読解力、人同士の繋がりがりから個々人のアーバンズムまで、やはり地域の人の考え方や関わり方をいかに変え、どんな関わり方をする「人」を遣せるかが都市の行く末を決めるのだなと、この一年で痛感しました。これからは教員として、「研究」と「教育」の比重を高めますが、そんな「現場感覚」を忘れない研究者になりたいな、と思っています。4 年間本当にありがとうございました。

▼UDCS スタッフでの忘年会（これからもまだまだ頑張ります）



▲去る 3 月 25 日、午前には学位授与式が、午後には追いコンが行われました。

▶追いコンは「神楽坂ラリアンス」。去年よりも少ない人数でアットホームに。今回の二次会は「神楽坂えちご」で、修了する松本さんのバイト先のご縁で紹介していただきました。

きっとこのメンバーで集まるのはこれが最後のはずで、いつまでも話は尽きませんでした。



2019 / 3 / 25

中島研究室、さいどのうたげ

▶卒業生への贈り物は、色紙…ではなくレーザー彫刻版。それぞれ修論・博論の対象地域が刻印されている過去に類を見ないメッセージ。合わせて研究室のロゴ入りの三角スケールも。

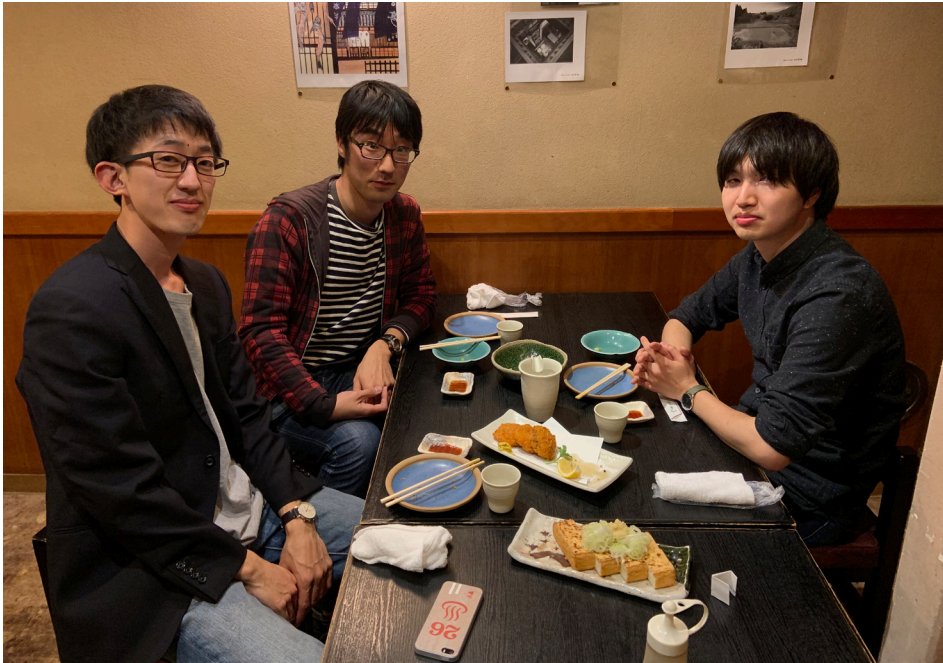
▼卒業生からは先生方に内子の地酒、「吹毛剣」が送られました。



▲今年も追いコンで都市デザイン研究室マガジンの編集長が交代しました。いつものように、現編集長からの指名による代替わりです。来年 4 月からの新編集長は前山倫子。きっとまた少しずつマガジンも変わっていくでしょう。来年度からの新 M2 の活躍に期待しています！

（左：新編集長・前山／右：元編集長・中戸）





# 3人で編集後記

## Editor's Notes

3月某日、本郷「宮本」にてマガジン編集部中戸、但馬、岡山の3人が集まった。編集部M2は修了したのが3人中1人だけ。2人は置き手紙を書かなかったの、ここでは「編集後記的な座談会」と題して、マガジン編集部員として過ごした日々の振り返りや、後輩部員へのメッセージを美味しい肴とともに語る。

text\_OKAYAMA/M2

## デザインの変更しました

中戸：2年間お疲れ様でした。

一同：乾杯！

岡山：年度始めにデザインを一新出来たのは大きかったね。

但馬：ヘッダーに写真が入ったのは大きかった。あと3段組が基本になったよね。

岡山：見出しの日本語と英語のデザインとかinfo欄も変わった。

中戸：infoは去年から少しづつ変えてて、今年はいろいろ体系化できた感じ。ただもうちょっと凝りたかったかな。

岡山：本当はロゴタイプも変えたかったんだよね。

## 今年度をふりかえる

但馬：5月は最初、テーマを三国祭りがあるから三国にしようとしたんだよね。

中戸：それで特別号として三国を作った。

但馬：いい記事だった。現地で配らないとね。

今年は各プロジェクトをテーマにしたね。三国、手賀沼、上野の夜、佐原とか。

岡山：去年まではプロジェクトの扱いが主にinfo欄やwebマガジンだったからね。

但馬：関わってないプロジェクトの人がそのプロジェクトを取材するみたいなのはよかった。

中戸：去年はインタビューが多かった印象だけど今年は現地に行くことが多かった。

岡山：そういう流れを作れたのは大きかったね。

## ここからは反省します

中戸：ここまではよかったところだから、ここからは反省。

岡山：出席率が良くなかった！

中戸：M2もM1も集まらなかったね。

但馬：去年は三国プロジェクトの人が多かったけど、みんなプロジェクトがバラバラでスケジュール合わせにくかった感じ。



左：2018年7月号  
レイアウトが確立してきた号（主担当：前山）

右：2018年6月に発行した特別号。三国のUDCS設立から間もない状況をレポート。中戸が三国祭に合わせて取材に行った。（主担当：岡山）

中戸：あと、校正が遅かったりする。それとデザインを頼める人が減った気がする。

但馬：この間、デザインが簡素って永野先生に言われた。今年はミーティング時間は短くなったけど、デザインを詰める時間は減ったね。

中戸：レイアウトをいじる時間を取れてないのは大きいよね。でも7月号の前山さんのデザインは好きだよ。

但馬：余白をしっかり取ってて読みやすかった。あと、三国号も割とよかった。

中戸：今のM1にデザインをこだわったり好きな人が1人いるといいよね。

中戸：全体を通してM1の担当になった7月からもっと口出すべきだったかも。最後の方は自分のことで手いっぱい、それは反省。

岡山：同じく、最後は自分のことで精一杯になってマガジンに顔が出せなかった。そういう意味で去年のきしこさん（先代の編集長）、ずっといてくれて、ありがたかった。

## 編集部の後輩を語ります

中戸：4月はM1が4人きてくれたのは嬉しかった。

岡山：男女バランスも2人2人でよかったね。M1のみんなは企画力がある。今回の卒業・修士研究の先生のインタビューとかめっちゃめっちゃよかった。あの時のミーティングで前山が先生からのインタビューをめっちゃ推してたのね。強い想いがあると、マガジンってとんがるのかなあと思う。原の長春も勉強会開いたりすごく読み応えがあった。但馬：それはある。あとマガジンはメディアだからこれからどんどんSNSとかで発

信していけたらいい。

中戸：Instagramとか箭川が頑張ってるから、そこと連携していけたらいいね。

但馬：マガジン編集部の後輩一人一人について話してみる？

岡山：出席番号順で行くと、原！

但馬：好奇心旺盛。11月の研究室旅行の記事はよかった。

中戸：藤原は、ちょっと大人しいかな。もっと主張していいと思う。

但馬：ちゃんと全体が見えてるし、仕事人だし、着眼点もいいし、校正も一番ちゃんとやってくれてるよね。

但馬：次は前山。ちゃんと芯があるよね。10月のテーマを夜のまち歩きに決めて、上野と松本春菜を組み合わせ、やりきったのは良かったと思う。

岡山：前山さんはやっぱり頑張り屋さんって印象。あと研究室に一番いる。前山さん自身が研究室のメディアかもしれない。

但馬：最後は山口。ミーティングではよくしゃべってくれるイメージ。それで意外とチャレンジングなことしてたよね。研究室旅行の食べ歩きの記事とか今までになくて面白かった。

## 編集後記をふりかえる

中戸：最後にやりたい企画があって、2年間の編集後記を振り返りたい。

但馬：あー！それいい！3人とも全体的に反省しまくりだったよね。中戸の三国号の編集後記は会心の出来だった。

中戸：あれは一晚練ったボエム（笑）。

但馬：あと岡山の編集後記で意味わからな

## マガジン発行4steps

- 1 月初め mtg 1~2weeks
  - ・前月号の反省
  - ・今月号の議論
- 2 月末 mtg 4weeks~
  - ・今月号モックアップ＆議論
  - ・来月号の相談
- 3 校正シート about last 3 days of month
  - ・内容の校正・レイアウトチェック等
- 4 発行 last day of month
  - ・編集長が研究室メンバーにメール
  - ・HPへの投稿＆印刷して配布

岡山：去年の11月とか今年の5月かな。

中戸：岡山は日本語を勉強しよう（笑）。

但馬：去年の2月の編集後記はよかった。サブタイトルは内輪ネタになりすぎてなくて、編集担当の思いもちゃんと乗かってて割とよかった気がする。

岡山：あの号はミーティング中に2時間くらいサブタイトルで議論したんだよね（笑）。

中戸：実は、今年まだ1回しか書いてない。岡山：最後に書けるじゃん。楽しみにしよう（笑）。

中戸：M1の4人の編集後記だと藤原が面白い文章を書くんだよね。個人的にはかなりお気に入りの文章。

但馬：藤原はウィットに富んでる。その感じをもっと出してほしいよね。前山は率直な感想を吐露してる感じがな。

中戸：次の代にはもっと面白い文章を書いてほしいな。上の代からは口語体をよく直されてた気がする。特に岡山。

但馬：2年間色々あったね。あとは岡山、うまいことまとめて記事にして。

## ※さいごの編集後記

思えば二年前にこのマガジン編集部に入ってから、たくさんの方の文章を書いてきました。論文でもレポートでも試験の回答でもなく、記事として読んでもらうためのテキストとレイアウト。実はかなり貴重な経験だったのではないかと今になって感じます。みなさま、今年度のマガジンにもお付き合いました。ありがとうございます。来年度もまた、よろしく願います。（中戸）



URBANDESIGN  
LABORATORY

都市デザイン研究室マガジン編集部

編集長:中戸翔太郎 編集部員:岡山紘明, 但馬慎也, 原洪太, 藤原大樹, 前山倫子, 山口智佳